



Title	開高健 『裸の王様』論(二〇〇九年度卒業論文要旨集)
Author(s)	千葉, 悠登
Citation	札幌国語研究, 15: 62-62
Issue Date	2010
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2534">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2534</a>
Rights	

開高健『裸の王様』論

近代文学研究室 六四七一 千葉 悠登

本研究は、作品のタイトルにもなっている「裸の王様」という言葉にどのような意味がこめられているかを考察したものである。「裸の王様」が、誰の、どのような様を表した言葉なのかということについては、これまでの先行研究が不十分であったので、詳しく分析していった。

研究方法としては、最初に、本作品中にも登場する童話『皇帝の新しい着物』と比較し、どのような点が骨格として本作に導入されたのかを分析し、次に本作の独自に着想された部分と、それが表現されることの効果について考察した。

主人公の「ぼく」が社長の大田氏に反発するという構造は、童話からの導入であった。一方、独自の着想として、「創造主義」の導入がある。それにより、主張の異なる二者の対立構造が出来上がり、大田氏が社長であることから、権力を振るい争いに参加せずにその争いを眺めるといふ構造が出来たと考えられる。

本作における「裸の王様」像として、社長という権威を楯に、誰にも自らの愚を指摘されず争いを傍観している孤高な権力者が見出せた。争いの末「ぼく」が持っている画が太郎のものであることを暴露したことは、権力者が「皇帝」ではなく社長であるからこそできたことなので、「ぼく」の行為に、資本主義における権力者の独裁体制への警鐘と改善の願いを見出した。